

---

# 雪時計

るーぷ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪時計

### 【Nコード】

N8891S

### 【作者名】

るーぷ

### 【あらすじ】

余命一年の少女。

命の最期の願いは『世界を見てみたい』

雪の降る季節にはじまった少女の旅。

多くの人との出会い、そして別れ。

そして、少女は最後に。

## プロローグ

世界はお金がある者に有利だ。

お金さえあれば、なんでも買える。

なんでも買える、ってことは幸せってことだ。

極端な話、命だって、気持ちだって買えてしまう。

買えないモノがあるとしたらそれは。

時間ぐらいだろう。

季節は冬。

人々は恋人と街を歩き、雪が人々を祝福していた。

「あのね」

街外れの大きな屋敷。

その中の一部屋には艶のある黒髪と雪のように真っ白な肌の少女。  
真っ白なレースとフリルがついたワンピースを着ている。

そして、隅の方にはボロボロの汚い服を着た少年が座っていた。彼女は暖かい部屋の中で窓越しに外を見ていた。

「私、死ぬんだ」

少女は悲しくも嬉しくもない様だった。

その言葉は、明日の天気ぐらいの意味しか持ってなかった。

少年はその言葉に反応を示さない。

それは、『どうでもいい』、と言うよりは『知っている』と言う様子だ。

「もう、次の雪は見られないのかな……」

少女は窓の外を見て呟く。

雪はただ静かに降っていた。

## プロローグ（後書き）

オリジナルキャラ、バンバン出ますよ！

## 第一話

雪の国。

一年中寒く、夏の僅かな間以外は雪が降るその国を人々はそう呼んだ。

そして、今は雪の国で緑が見られる短い夏。

雪の国の中でも特に夏が短い街の外れに大きな屋敷があった。そこにはいつも一人のお嬢様だけが残されて暮らしていた。

「ねー、ヴェガー？」

一人の少女が椅子に座って足をぶらぶらさせている。

大きな黒い目に白い肌。まさに美少女だった。

その不満そうな表情が無ければだが。

「はい、何でしょうか」

テーブルの向かい側には銀髪の青年。

いかにも真面目そうでスーツにはシワ一つなかった。

彼はにつこり微笑んで、少女を見ていた。

「もう飽きたよお、いつまでやるの？」

少女の前にはたくさん数字の書かれたノートが置いてあった。

どうやら、簡単な計算問題のドリルらしい。

「いつまでもですよ、お嬢様。貴女のご両親の命令ですから」

「でもお……」

少女は泣きそうな、すがり付く様な目でヴェガを見つめる。

ヴェガはやれやれ、と胸元から小さなノートを取り出しぱらぱらとめくる。

少女は期待の眼差しで見ている。

「……では、ダンスレッスンに」

「ヴェガ、遊ぼうよ」

ヴェガの言葉を遮って少女は言う。

「ね、ちよつとだけ出かけようよ」

「駄目です」

ヴェガはすぐにきつぱりと言った。

少女は不満そうにふくれた。

「ヴェガのけーち、ばーか」

「ケチでも馬鹿でも結構です。では続きを」

ヴェガはノートを胸元にしまいながら言った。

その瞬間、ヴェガの視界が遮られた。

ガタガタ、と椅子が揺れる音がほぼ同時にする。

どうやら自分にぶつけられたのは計算問題の書かれたノートだと認識するのと、少女が椅子から消えているのを見たのは同時だった。

「今日も逃げらたんか、ヴェガはん」

「……今日もいたんだね。メイドさん」

ヴェガがそう言うのと上から金髪の少女が降ってきた。

年齢は先程の少女より少し上、といったぐらいだろう。

「まったく、あんたはアホやな」。シエーラが靴脱がせたぐらいでいると思うとつたんか？」

ヴェガは何も言い返せない。

シエーラはいつも勉強の時間になると逃げ出すから、今日は靴を脱がせておいた。

もちろん、最初から効果があるとは思ってはいなかったが。

「で、シエーラは毎日どこへいつとんや？」

メイドが聞くとヴェガは言いたくなさそうな表情をする。

そして、無言のまま外を指さす。

メイドはその指の先を追う。そこは街の中心部から離れたところを指していた。

「あそこは……」

「街裏ですね。　ってメイドさんは知ってますね」

「あつかーん！ あんなとこに行つてはあかん！ ヴェガはん、うち、ちよつと行つてくるわ」

メイドは袖をまくり、髪を縛る。

彼女は長い髪は好きだが、こういうときには邪魔になる、とよく言っている。

「じゃ、ヴェガはん。あとでな」

メイドはそう言つと、窓を乗り越え飛び降りた。

街まで、歩きで30分かかる道を彼女が走るのが部屋から見えた。静かになつたいつものヴェガの部屋で彼は呟く。

「ここ……二階ですよ」

メイドの飛び出つた窓から、夏の匂いのする風が吹いていた。



## 第一話（後書き）

読んで、想像つくと思いますがプロローグより昔の話です。  
まだ、元気だったころ、ですかね。

## 第二話

その頃シェーラは、荷馬車に揺られていた。

「おじさん、いつもありがとう」

子供の足で歩いていては着く前に捕まってしまうので、シェーラが街に行くときは近くを通った荷馬車に乗せてもらうのだ。

「いや、いいんだよシェーラちゃん」

街の近くに住む者はシェーラをお嬢様、と呼ばない。

と、言うよりシェーラがそう呼ばれるのを嫌うため、ほかの子供と同じように接している。

シェーラは仰向けに寝転がる。空には白い雲が浮いていた。

「ねー、おじさん」

「ん、なんだい？」

男は振り返らずに答える。シェーラも相変わらず、上を向いたままだった。

「もうすぐ、私ねー7才になるんだよー」

自慢げにシェーラは言う。

「おお、そうか……あの、小さくてよく脱走ばかり　は今もだな」

「脱走じゃないもん！　お出かけだもん！」

シェーラは起き上がって反論する。男は楽しそうに笑っている。むー、とシェーラは膨れる。しかし、すぐ笑顔へと変わった。

「街だ……！」

シェーラは荷馬車を飛び降りる。

「ありがとう！　おじさん！」

そして、細い道を走っていった。

細い道はだんだん暗く汚くなっていく。

シェーラの庶民では手を出せない様な金額の服は黒く、臭くなる。しかし、シェーラは気にせずに進む。すると、道が終わり、少し広い空間に出た。

もちろん、屋外で天井が無いのでさっきまでの道より明るい。

「クロー、ククロククロー」

シェーラは何度も呼ぶ。

すると、上から少年が降ってきた。

年はシェーラと同じぐらいだが、身にまとっている服はボロボロ、髪はぼさぼさだった。

シェーラはその少年を見つけると、嬉しそうな顔をする。

「クロっ！」

少年はシェーラに早足で近付き、ポコン、と一発殴った。

お嬢様である彼女に手を出せる子供は彼ぐらいだろう。

と言うより、彼以外誰も殴らない。

「いたあ……」

「俺は、クロスだ！ ク・ロ・スっ！ 猫みたいに呼ぶんじゃない  
！」

クロスはふん、と鼻を鳴らす。

クロスはこのあたりのガキ大将みたいなものらしい。

シェーラはクロスの目の前に両手を出す。

そこには小さな紙鼓がたくさん乗っていた。

「……何だ、これ？」

「キャンディ！ おいしいよ」

シェーラは包み紙を開けて、クロスの口の前に持っていく。

シェーラの笑顔があまりに無邪気なので、仕方なくクロスは口を開ける。

「甘い……な」

「ね、おいしいでしょ！」

シェーラはクロスに喜んでもらい満面の笑み。

クロスの顔は見る見るうちに赤くなる。シェーラは不思議そうに

クロスの顔を眺めている。

クロスは沈黙が気まずくなり叫ぶ。

「こんなもんで、腹いっぱいになるかあ！」

「じゃ、明日来て。私とクロスの誕生日だから」

「はあっ！？」

「じゃ、絶対だからねっ！」

「おいちよっ」

行くとはだれも言っていないのだが、シェーラは手を振り、元来た道を走っていった

### 第三話（前書き）

サブタイトル、つけるなら  
『誕生会前編』 でしょうかね……。

### 第三話

「……」

きらびやかな空間にクロスは場違いだ、と思う。  
後悔とは字の通り後から悔む。今まさにそれだ。

「クロっ！ 来てくれたんだね！」

シェーラがパタパタと走ってきてクロスに飛びつく。

そう、今日はシェーラの7才の誕生日。

シェーラはいつもよりさらに高価そうな服を着てご機嫌だ。

クロスは溜息をつく。自分の服装があまりにもみすばらしい、からではない。

シェーラの後ろにリリーの姿があつたからだ。

「おークロス、あんた来たんか？」

表情はにこやかだったがりりーからは殺気が出ている。

一回会っただけでお互いに合わない事が分かっている。好きではない、ではなく嫌い。

実はクロスはこの前リリーにも会い、『絶対に来るな』と言われていた。

なのでクロスはなるべくリリーとは目を合わせないようにする。

「クロー、こっちだよー早く来て！」

シェーラは少し離れたところでクロスを呼ぶ。

「はよ行き、うちよりも厳しい人が向こうに居るから」

リリーはクロスが中に入ることを仕方なく認めたらしい。

こう言われてしまうとクロスも帰るわけにはいかない。クロスとしては、ここで追い返されてしまっても良かったのだが。

クロスは仕方なくシェーラがいる方へ歩いて行った。

「クロはここに座って！」

シェーラは自分の右隣のイスを叩く。クロスはシェーラの言うがままにする。

シェーラの左隣にはスーツを着た若い男性が座っている。

クロスの推測では兄ではないかと。まさか、父親なわけは……ないな。

で、多分こいつがリリーの言っていた『厳しい人』なのだろう。

「初めまして、クロス。私はお嬢様の家庭教師のヴェガと申します」  
ヴェガはそう言いクロスに頭を下げる。

クロスは何も言わずに軽く頭を下げた。

「では、本日のお嬢様誕生記念会を始めましょうか」

ヴェガはベルをチリリと鳴らす。

「え、ちよつと待てよ！ お前、親は？ さっきのメイドは？ 仲、良いんだろ？」

クロスの問いかけにシェーラは首を振る。

そして、ヴェガがシェーラの代わりに答えた。

「お嬢様のご両親は忙しい身ですので、私がお嬢様の全ての面倒を見ております。メイド、リリーのことですね。確かにリリーはお嬢様と仲がよろしいですが、メイドですので参加はできません」

ヴェガはにつこりと微笑んで言った。シェーラは少しだけ悲しげな表情をする。

「シェーラ」

クロスが話しかけようとすると、目の前の料理が置かれる。

シェーラはその途端笑顔になった。

「では、一度食事にしましょうか」

ヴェガがそう言ったので、クロスはシェーラに何も言えなかった。

## 第四話

「何故、お嬢様はクロスを招いたのです？」

食事もほとんど終わり、あとはデザートだけとなったころ、ヴェガが口を開いた。

シェーラはうーん、とうなり声をあげて悩んでいる。

そこでヴェガが続ける。

「お嬢様には由緒正しき家柄の婚約者がいるのですからこのような軽率なまねは」

「じゃ、私クロと結婚する。クロのこと大好きだもん」

シェーラはにつこり笑ってそう言った。

ヴェガは勿論だったがクロスも言葉が出ない。

「だから、クロと結婚するよ」

「バ、バツカじゃねえの！」

笑顔で話すシェーラにクロスは立ち上がって叫んだ。

シェーラはきょとんとした顔でクロスを見ている。

「えー、私とクロは『こいびと』じゃないの？」

一体何をどうすればそうなるのかクロスには理解できない。

シェーラとは同じぐらいの年齢だが、シェーラの思考はめっちゃくちゃだ。

「違うにきまつてるだろっ！」

「じゃあ……何？」

「友達だ、友達」

友達かあ……、とシェーラは呟く。

しばらくシェーラは無言でいたが、笑顔でクロスの方を向く。

「うん！ 私とクロは一生友達だよっ！」

シェーラの笑顔がクロスの胸に突き刺さった。

なぜか、彼女の笑顔がさびしそつに見えたから。



「ねー、クロー？ 本当に帰るの？」

誕生日パーティが終わり、クロスは外へ出る。

もう、夕方なのでシェーラは外出させてもらえない。

「当たり前だろ」

「ここに住まないの？」

シェーラはさびしそうに言うが、クロスは騙されない。

「ああ、住まない。さびしいなら婚約者でも呼べばいいだろ」

「……………」

シェーラはむうつ、としてみせる。クロスはシェーラを抱きしめようとした。

が、止めておいた。

「では、クロスは私が送りますので」

ヴェガが現れ、シェーラの頭をポンポンとなでた。

「じゃ、またね。クロ」

シェーラはそう言い中へ入っていった。

その瞬間、ヴェガから殺気を感じた。シェーラへのではない、もちろんクロスへ向けたものだ。

「……………」やっぱり俺が嫌いなんだな」

「いえ」

ヴェガはクロスと目を合わせようとはしない。

真っ直ぐ前を向いたまま答えた。

「まあ、好きか嫌いか、と問われますと嫌いですが。……………」出来るだけ、お嬢様に関わらないで欲しいだけです」

はつきりと拒絶された様な気がする、とクロスは思った。

クロスが何も言わずにいると、ヴェガが口を開く。

「お嬢様には私が許可するまで会わないでください。もちろん、ここにも来てはいけません」

クロスは黙ってうなづく。

元々、関わるはずのない二人だからこうすることが互いの人生にとって最善だということ。

シェーラは婚約者と結婚し、幸せな家庭を築くこと。クロスはその街裏で毎日生きるために汚い道を進むこと。それが定められていた道なのだから。

「分かってる、俺の住む世界はここじゃないな……」

「いえ、それはあなた自身が決められることです」

予想外の言葉がヴェガの口から出た。

ヴェガはクロスの方を向き、微笑む。

「貴方がお嬢様にふさわしい人間になればいいんですよ」

それは無理だ。

クロスは口には出さなかったがすぐにそう思った。

なぜなら、もう俺達は会うべきではない。会えないのだ、と。

## 第五話

それから、二人は再開することなくシェーラはお嬢様らしく成長し、クロスも強く素早い少年になり、街裏では有名な存在となっていた。

最後に会ったシェーラの誕生日から、八年がたとうとしていた。

「兄ちゃん、おなかすいたー」

小さな汚れた子供が一人の少年に群がる。少年は子供たちの中で最も背が高く最年長だった。

そう、彼こそがクロス。あの時とは比べ物にないくらい強くなり、自分だけではなく他の捨て子まで育てている。街裏のリーダー的存在だった。

「分かった、分かったから少し離れろっ！」

街裏に今は大人がいない。数年前に大人達は『シヨク』を与えられ、他の場所へ移っていった。残されたのは子供だけ。

クロスの育ての親もどこかへ行ってしまった。

だからと言って、死ぬのが普通の世界で別れぐらいで悲しむほど脆くはない。

「兄ちゃ、ちゃ」

クロスの服代わりにしている布の端を2才ぐらいの男の子が引っ張る。そして、もう片方の手で街裏と大通りをつなぐ唯一の通路を指さしていた。

そこには、真っ黒のフードを被った『大人』がいた。

「誰だ、お前……」

クロスは子供たちを自分の後ろに置く。そして、腰のナイフに手を当てる。

体格差はかなりある。見たところ、相手は老人ではない。それに、かなりの実践を積んでいる様な気がする。野生のカン、という奴だ。

「クロス……ですね」

黒フードは一步ずつクロスに近づく。ゆっくりと静かに。クロスは、ナイフをフードの人間に向ける。

「おや……？ 迎えに来たのにその態度ですか、クロス」

黒フードは意味の分からない事を言う。

それが、作戦なのかもしれない。クロスは全神経を黒フードに集中させる。

ただ

それが間違いだと気づく時、彼は地面に押し付けられていた。どうやら、仲間がもう一人いたらしい。

「にいちや」

誰かが叫んだような気がした。

しかし、クロスの耳には届かなかった。

馬車が一定のリズムで揺れている。

ああ、俺は そうだ、あいつらは誰なんだ……？

ぼんやりとクロスは考えていたが、急に起き上がった。

すると、そこには男と少女が座っていた。男の方は見たことがあった。

「あ、起きたんですね。クロス」

「お前は……ヴェガ、か？」

しかし、それにしては若すぎる。八年前と何も変わらない。

「ええ、そうですよ」

「じゃ、何しに来た」

クロスは立派な人間にはなっていない。ふさわしいわけがないのだ。

ならば、どこに連れていかれるのか。何のために。

「貴方を迎えに来たのですよ」

「は……？」

ヴェガは微笑みを浮かべて続ける。

「貴方とお嬢様が会うのを許可します」

## 第六話

「なんでだよ。俺は、ふさわしいとは思えないぞ」

「ええ、ふさわしくはありませんが貴方にはお嬢様に会ってもらいます」

「どうやら、俺に選択権は無いらしい。」

がんばれば、こいつぐらいなら振りきれられるかもしれないが、実力が分からないのでやめておこう。

まだ、死にたくはない。それに、メイドも一緒にいるし。

「で、あいつはもう結婚したのか？」

クロスは仰向けに寝そべって聞く。

「いえ」

「じゃー俺なんかが行ったらまずいんじゃないのかー？」

「お嬢様はもう、一生独り身です」

ヴェガは淡々と何度も繰り返した言葉のように言った。

そんなはずはない。確かに昔、こいつは言ったはずだ。

「お嬢様は無誰にも求められませんよ。その血筋と財産があったとしても」

クロスは鼻で笑った。

「じゃ、なんだよ……。俺を婚約者にするつもりか……？」

「いえ、貴方の様な屑で野蛮な人間、お嬢様が選んだとしても引き離しますよ」

散々な言われようだ。婚約者なわけ無いとは思っていたが、ここまで言われるとも思っていない。

しかし、このぐらいではクロスの心はおれなかった。

「じゃ、何のために俺は連れて行かれるんだ」

「お嬢様がもう、意味のない存在になってしまったので自由にしてあげよう」と

そのあと、しばらく馬車に揺られ、見覚えのある屋敷が見えた。

「さあ、着きましたよクロス」

クロスは馬車から降りる。リリーがクロスの先を歩き、ヴェガが後ろを歩いた。

そして、ドアの前まで行くとリリーがドアを開けた。

「どうぞ、お入りください。クロス」

昔のようなしゃべり方ではなく、標準語でリリーは言った。

クロスは軽く頷き中へ入る。

「ほんとに変わってないんだな……」

「ええ、変わるのは生き物だけです」

ヴェガがドアを閉めながら言う。

「こちらです」

ヴェガが案内するのは二階の部屋だった。

クロスは行ったことのない場所。ヴェガの後ろをついていく。

そして、他の扉とは見分けがつかないがどうやらここがシェーラの部屋らしい。

「入って……いいのか？」

「ええ、もう貴方達はただのシェーラとクロス、という関係ですから規制する理由がありません」

クロスはゆっくり扉を押した。

再び、彼らは出会い物語は始まる……。

## 第七話

「誰……？」

声が聞こえ、クロスは立ち止まる。

部屋の奥から真つ白なワンピースを着た少女が現れたからだ。

少女は一瞬驚いたようだったが、微笑んだ。

「クロス……でしょ？ 私、分かるよ」

「シェーラ……」

彼女は病的に白かった。肌はまるで雪のようだった……なんて、安直な表現だろうか。

「やっぱりクロだね、会いたかった」

シェーラはクロスを抱きしめる。クロスはそつと、シェーラの身体に触れる。

15才の少女、とは思えないくらい細い体。

「お前……本当にシェーラか？」

クロスは思わず問いかける。

昔はもつと元気で、健康体だった……様な気がする。

シェーラはきょとんとしている。そして、くすくす笑い始めた。

「何言ってるの？ 変なクロ」

「だって……」

「お嬢様、少々良いですか？」

ヴェガが中に入ってくる。シェーラは少し不満げに頷いた。

「では、クロス。こちらへ」

クロスはヴェガの後についていき、部屋を出た。

どこまで行くのだろう、と思っているとヴェガはすぐ隣の部屋に入る。

クロスが中に入ると、ドアは閉じられ後ろで鍵がかけられる。



「で、何なんだよ。あいつは……なんであんな……」

「お嬢様は病気です。故に婚約者達は去りました」

ヴェガは無表情で言う。

だからか。もう、永遠にシェーラは結婚できないから、会えた。

「なので、お願いがあります」

ヴェガはクロスに頭を下げた。

「お嬢様と……一緒にいてください」

「それは……」

やっぱり結婚しろ、ってことなのか？

そりゃ、昔は好きだって言われたけど……。

「一緒にいるだけですよ。友達です」

ヴェガは頭を上げて、クロスに言う。

あくまで、身分の低い俺と婚約させるわけにはいかない、友達、か。

だが、クロスにだって仲間を養わなければいけない。そういう義務がある。

どちらを選ぶか。

「ああ、分かった」

「俺はここにいるよ」

クロスは仲間を捨てた。

たった一人の心を救う、それだけのために。

彼は、もう一度彼女に笑ってほしかった。

明るい太陽の様に。

「では、クロスはこちらの部屋を使ってください」  
クロスは頷いた。

## 第八話

「クロ、ほんとにここに住むの!？」

「あ、ああ……」

クロスが頷くと、シェーラは嬉しそうに笑った。

こうしていると、病気だなんて嘘のようだ。

「じゃ、毎日一緒だね。私、外に出れないから……ずっと、クロに会いたかったんだよ」

「え……」

外に出れない？

クロスはおそらく驚いた顔をしていたのだろう。シェーラはうんと頷く。

「私ね、病気なんだって。だんだん身体が動かなくなって、死んじやうんだって」

シェーラはゆっくり立ち上がる。

その顔は少し悲しげだった。

「……………」

「でも!」

シェーラはクロスを真っ直ぐ見つめる。

「クロに会えたから嬉しいよ。ヴェガは私が結婚したら、クロスに会わせないつもりだったのよ」

シェーラは笑っている。

シェーラが笑っている。

クロスは彼女の笑顔を目に焼き付けていた。

「……って、クロ? 聞いている?」

「あ、ああ。聞いている」

「……じゃ、なんて言った」

「俺に会えてうれしいんだろ?」

「違うつ、そのあと!」

そのあとは聞いてなかった。と言うか、何か言ってたか？  
クロスは思いたそうとするが、シェーラの笑顔だけしか思い出せない。

……って、何を考えているんだ、俺は。

そう思い、目の前を見ると、シェーラは明らかにむっとしている。

「も、いい。クロの馬鹿」

シェーラはそう言いそっぽを向く。

「わ、悪かったよ……」

一応謝っては見るがシェーラは反応を示さない。

しかし、明らかにクロスをチラ見している。

「じゃ……」

シェーラが顔を少し赤くしながら言う。

少し口を開きかけ、一度閉じる。

そして、クロスの方を向きほほ笑んだ。

「今、街で一番おいしいお菓子、買ってきて」

「……は？」

「いいから、早く！」

シェーラにせかされクロスは部屋を出た。

部屋を出るときにシェーラは小さな財布をクロスに押しつける。

おそらく、彼女の自由にできるお金の一部だろう。

そう思っているとドアは閉まり、鍵のかかる音がした。

「なんだったんだ……？」

クロスはそう呟きながらも一番おいしいお菓子は何かを考えていた。

「お嬢様、どうして止めたのです？」

くすくす、と笑いながらヴェガが聞く。

ヴェガは当たり前のようにシェーラのベッドの上に座っていた。

いつの間にか、ヴェガもリリーと同じく神出鬼没出来るようになった。

っていた。

「何を……」

「分かっていますよ？ あの時、キス、させようと思いましたね」  
「いったいどこから何を見ていたのだろう。」

ヴェガはシェーラを壁際に追い詰め、見下ろす。

「お嬢様はもう、結婚できない身となったのですからあそこでクロスとキスしようが、

お嬢様の身が穢れようが私は止めませんでしたよ」

「だって……」

シェーラはクロスを見上げる。

「クロスに嫌われたくないから」

クロスに会えた、それだけで幸せ。

その代償が結婚だとしても。私はクロスに会うことの方が幸せ。

「そうですか……」

「うん」

「なら、クロスと結婚すればいいのでは？ 結婚出来て、クロスとも一緒にいれますよ」

シェーラは耳まで赤くなる。

そんなに自分の思考は読まれやすいのか、と。

しかし、ヴェガはシェーラを見ながら面白そうに笑っただけだった。

「な、なんで！？ そんなにや……そんなこと言っていないじゃん！」

「そうですね。では、私はこの辺で」

そう言い、ヴェガは微笑んで部屋を出ていった。

シェーラは顔の熱りが治らず枕に顔をうずめていた。

## 第九話

「なんで、俺なんか……」

一人でぶつぶつ言いながら、クロスは街の大通りを歩く。

普段なら絶対に来ない場所なので、いまいちよくわからない。

「あいつも、使用人に頼めばいいだろうっ！」

大通りは人で溢れかえっている。

こんな場所はあまり好きではない。気配も音の感覚もつかみにくい。

「はあ……」

クロスは何度目かの溜息をつき、一つの店に入った。

そこは街の中流家庭の少女たちに人気の店、だ。チビどもの一人が言っていた。

少なくとも、汚い裏街の男が一生入ることはなかっただろう。

ガラスのドアを開けると甘ったるい匂いが鼻を突く。

そして、女の高く、耳をつく声。

クロスは、人をかき分けながら、商品をいくつか掴む。

普段ならこのまま外に出てしまいが、今日はそう言う訳にはいかない。

「おい……」

レジに商品を置く。おそらく、店員は薄汚い彼に恐れを抱いたことだろう。

一瞬の沈黙があったが、店員は何事もないように振る舞う。

しかし、彼女に笑顔はなく、指先が微かに震えていた。

クロスはそんな彼女になぜかいら立ち、シェーラから渡された金貨の入った袋を置く。

明らかに商品の代金より多い。女性が顔を上げると、クロスと目が合う。

クロスは無表情で女性の手から商品を奪い、無言で店を後にした。

「　　ったく……」

街の奴らは、いつもああいっ目で見る。

恐れと同情、そしてそこから生まれる安堵。

クロスはおそらくいらついていた。普段では、絶対に犯さなはずのミスを犯す。

人にぶつかったのだ。　　いや、正確にはぶつかられたのだが。

ぶつかったそれは激しく地面にたたきつけられてた。

「おい……、大丈夫か」

クロスは手を貸そうと伸ばそうとしたが、彼はすでに立ち上がった。いた。

周囲には赤い果実が転がっている。彼は急いでそれをかき集めていた。

クロスは仕方なく、赤い果実を拾い渡す。

「ほらよ」

彼は顔を上げた。白い肌に赤と黒のオッドアイが印象的だった。

まだ、幼い感じのする顔立ちだがクロスは自分と同じものを感じた。

「す、すまぬ……」

彼は軽く頭を下げるとクロスの手から果実を受け取り走り去った。

あれは、この辺では見ない。クロスは思う。

おそらく、南の国のものだろう。服装の柄の感じからしてもそうだ。

そして、彼は自分より強いものを信じず、屈しない瞳をしていた。それにしても……」

クロスはひとり呟く。もちろん、誰にも聞こえてはいない。

「あれは、なんだったんだ？」

赤い果実の果汁がクロスの手に嫌な甘だるい匂いだけを残してい

た。

## 第十話（前書き）

この前の逃走中も面白かったですね……って、関係無いですけど。そのうち、オリキャラ等々を混ぜて書きたいなあ、とは思ってますが。



## 第十話

「ほらよ」

シェーラの部屋に入り、クロスは買ってきたそれを軽く投げた。  
「ふえ!？」

いきなり投げられたので、シェーラは受け取れずに床に落とす。

「あ、ごめん……」

シェーラは急いで拾い上げ、袋を開ける。

そして、嬉しそうに微笑み、袋の中の一つを口に入れた。

「美味しい……ありがとう、クロ」

「って、俺は買ってきたただけだな」

しかし、シェーラは首を横に振る。

「クロが美味しい、って思えるものを食べられるのが嬉しいの」  
クロスはドキリ、とする。

シェーラの食べているそれが何なのかすら分からない。

「あ、ああ……そうか」

そう言った瞬間、右手に鋭い痛みが走った。

苦痛にクロスは一瞬顔をゆがませる。

「どうしたの？」

心配そうにシェーラがクロスの顔を見つめる。

「何がだ？」

シェーラに心配かけるわけにはいかない。クロスはそれだけだった。

クロスにそう言われたシェーラは、何も言えない。

何が、と聞かれたら、あれは見間違いだっただと思うしかない。

「じゃ、俺はもう部屋に戻るぞ」

「うん、ありがとう」

シェーラは笑いながら、言いお菓子を食べた。

「……」

クロスはシェーラの部屋を出て、壁に左手をつきなんとか体を支える。

そして、自分の部屋に向かって体を引きずるように歩き始めた。右手だけでなく痛みは広がって、右半身が熱を持っているようだった。

「無様な姿ですね」

頭上から声がし、顔を上げるが目の前には誰もいない。

確かに、あいつ……ウエガの声がしたはずなのだが……それすらも幻聴だというのか？

「こつちですよ」

さらに上から声がする。クロスは恐る恐る顔を上げた。

すると、天井に穴が空いていて、そこからウエガが顔をのぞかせていた。

「何をしているのです。クロス」

クロスは何でもなないように右手を隠す。

「なんでもねえ」

「見せなさい」

ヴェガはクロスの隣に降りて、右手首を掴む。そして、無理やり手を開いた。

クロスの右掌は赤くなっていて、特に中心部分が酷く膿んでいた。

「一体これは何ですか」

「しらねえよ」

「では、来てください」

無理やりクロスは手を引かれ、廊下を進む。

そして、一つの部屋に入れられた。その部屋はシンプルな作りの書斎の様だ。

あるのは一つの窓に黒いデスク、それに大量の本だけだった。

「なんだよ、ここ……」

「私の部屋です。いいからそこに座りなさい」

クロスはしぶしぶ座る。ヴェガはほんだなをガチャガチャあさる。折角、綺麗に整頓されていた棚がめちやくちゃだ。

ヴェガは漁り、かき集めながら電話をかける。

「ああ、今すぐ来れるか……。頼む」

手短に話し、クロスの座る椅子の前に来て跪く。

無理やり、手を掴み掌に黒い液体を染み込ませた布を巻いていく。

「っ！」

「いいから黙っている。何でそうなったのか分からないから一応万能薬を塗っておいた」

ヴェガは手際よくクロスの右手に布を巻いていった。

「……手際、良いな」

「当たり前だ。私はお嬢様の保護者の様なものだ。いざというときこれくらい出来なくてどうする」

ヴェガは顔も上げずに答えた。

なぜか、クロスにはそう言うヴェガの口調がさびしく聞こえた。

「なんか、お前って……」

クロスは一度言葉を切って反応を見るが、ヴェガは何も言わない。

「俺にだけ冷たいよな」

ヴェガはぴく、と肩を動かす。そして、顔を上げた。

どうやら、巻き終わったらしい。ヴェガは立ち上がり、布と黒い液体の入った瓶をデスクに置く。

「あ、ありがとな」

そうクロスが言いかけた。

その時、ヴェガの目つきが鋭く、冷たく獣の様だということに気付いた。

そして、クロスは壁に押し付けられる。

「なっ  
っ！」

「貴方もお嬢様と同じように」

ヴェガは怪しく微笑みながら、優しく語りかける。

「それ以上に優しくしてあげましょうか？」

沈黙が続く。ヴェガはよく分からない瞳でクロスを見つめ続けた。

「冗談ですよ、私も貴方に対して乱雑にしすぎましたね」

まるで、シェーラに話す様なとげのない口調で言う。

やはり、こいつは俺のことが嫌いなんだな。クロスはヴェガの顔を黙って見つめた。

「なんです？ ああ……分かりましたよ。貴方に対しても今まで以上には優しくします」

ヴェガは半分諦めた様な口調で言った。

そうしていると、いきなりドアが開き一人の小柄な少女が中に入ってきた。

## 第十話（後書き）

一応この作品は、男女の純愛をテーマとしています。  
シェーラとクロス  
間違った方向には進みませんよ!?

……たぶん。

## 第十一話

「……邪魔だった？」

クロスが壁に追い詰められていた姿を見て彼女はそう言った。

「いいえ。それより待ってましたよ、ウィル」

「ったく……いきなり呼ぶから姫に何かあったのかと思ったじゃん」  
少女　ウィル、は大きなカバンを引きずるようにしながら中に入ってきた。

そして、ヴェガを押しつけて、クロスの手を掴む。

そして、巻いたばかりの布を解いていく。

「ああ、これは……」

「知っているのです？ウィル？」

ウィルは頷く。

「南の方で栽培されてる薬物の一種だよ。まず北では見ないね」

「それは……何に使うんです……？」

クロスは恐る恐る尋ねる。

「戦争の道具を作るんだよ」

ウィルは淡々と言う。

「触れれば、その身を焼きつくし。取り込めば、痛みと苦しみを忘れてしまう」

クロスは彼、のことが気にかかった。

彼は、あの果実について知っているはずだ。

だが、彼はあれを素手で触っていた。

「そして、無限の命を手に入れる代物、って数十年前は言われてたけど、

結局は不老不死なんてありえないのよ」

「随分詳しいんですね……」

「当たり前でしょー、あたしは医者だよー？」

ウィルはにっこり微笑む。

そうしている間にも、クロスの治療は続けられる。

「つて、言えたらよかったんだけどね」

「え？」

「随分簡単に言ってしまうんですね、ウィル」  
「ヴェガは溜め息交じりに呟く。」

「ま、良いじゃん」

「あの、何の事だか……」

「ウィルはにつこり、微笑む。」

「あたし、食べたもん。ま、不老不死？」

「……………」

「信じられない。」

「不老不死、なんて魔法があつたとしても叶わない。」

「あ、信じてないでしょ？ 証拠、見せたげる！」

「そう言つと、右目をこする。」

「すると、色のついた薄い硝子の様なものが取れた。」

「左目は透き通るような青。そして、右目は」

「赤い……………」

「そ、右目がみーんな赤くなるの」

「まさか……………」

「街であつたあの少年。」

「どうかしたの？」

「俺、街であつた。多分、不老不死……………」

「どこで」

「ウィルの表情がわずかに変わった。」

「口調は鋭い。」

「え、ああ……………」

「特別あの少年に思い入れがあるわけではないが、何か悪い予感が」

して口を閉ざす。

「じゃ、そこに連れてきなさい」

そうして、クロスはウィルに手を引かれ連れ出された。

「ヴェガ、あんたもだよっ！」

「はぁ……」

ヴェガも仕方なく二人の後を追った。



## 第十二話

「で、ほんとーにここなの？」

ウィルはクロスに静かに問いかける。

クロスは無言で頷く。

「ふーん……」

ウィルは座り込み、道を調べ始めた。

「あの……何してるんですか？」

「ねえ、クロス。あたしのこと怖い？」

クロスの問いかけに答えず、ウィルが聞く。

一瞬、何を聞かれていいのか分からなかった。

「何故……ですか？」

「んー、だって、クロスさ、あたしには敬語じゃん」

そう言いながらもウィルは何かを探しているようだった。

クロスは驚いた。自分が無意識のうちに敬語を使っていたことに。

「あの、怖いとかじゃなくて……年上は敬った方がいいのかと……」

クロスは言葉に詰まりながらも言いきった。

ヴェガはそれを聞いて、少し複雑な気持ちになっていたのだが、

誰も気に留めなかった。

「あー、そんなのいいよ。見た目は10才位の可愛い少女なんだし」

「ですが……長く、生きてるのでは……？」

「そんなことはない」

ヴェガが口をはさんだ。

「せいぜい、人生は30年ちよつとだ」

「えー、そうかなあ？ あんた、いくつになったのよ？」

ウィルが膨れてヴェガに聞く。

「私はもう、28ですよ」

「えー、そんなになったの？ あんたは昔からほんと、変わんないわねー」

まるで、不老不死みたい。

「じゃ、あたしは33才かー」

ウィルは遠い昔を懐かしむように呟いた。

「ウィルとヴェガってそんな昔からの付き合いなのか？」

クロスが聞くとウィルはくすくす笑いだす。

「そーよ。ま、28年の付き合いになるわね」

「違いますよ、10才前後は会ってませんから、26年ぐらいでしよう？ ウィル」

ヴェガがそう言うと、ウィルは立ち上がり、ヴェガのすねに回し蹴り。

「もー、仕事時間じゃないのよ、ヴェガ」

「そうだったんですか……」

ヴェガは足をさすりながら呟く。

「さあ！ 謝りなさいっ！ 昔、教えてあげたでしょ！？」

ウィルのキャラ崩壊が凄まじいな、と思いながらクロスは黙って見ている。

手や口を出したら、こつちまで被害がありそうだ。

ヴェガは小さくため息をつき、ウィルの目線に合わせる。

「すみませんでした……」

ウィルはむっ、とする。

「続きは？ ちゃんと最後までしないとねえ……」

ウィルはなんだか楽しそうだ。

ヴェガの表情はだんだんしぶくなる。

「……すみませんでした、姉さん」

「よーし、よくできたねえ、ヴェガー」

ウィルはヴェガの頭をよしよし、となでる。

「ね、クロス。分かったでしょ？」

「……兄弟だったんだ……」

その割には随分似てないな、と思う。  
まるで、光と影の様だ。

「そー、これからもヴェガをよろしくね」

ウィルはそう言くと、一瞬だけ笑う。

次の瞬間、金属音が響いた。

「やっとなれたのね」

ウィルの手にはナイフが3本握られていた。

そして、いつの間にかあの少年が目の前に立っている。

「ああ。お主の名は？」

「あたしは、ウィルフィリア・ヴェット。あんたは？」

「拙者の名は、リヨウ・サザナギ。反逆者、ウィルフィリア。拙者が成敗いたす！」

リヨウ、と名乗った少年は南の方で使われている、刀、という武器を振る。

見た目はウィルよりも上だが、おそらくウィルの方が生きているのだろう。

「まさか、まだボスがあたしのこと探してたとはねー……」

「あたり前であろう。お主の能力は珍しく、強力だ。野放しになっているぐらいなら、

消してしまった方が己の身の安全だろう」

「へー。じゃ、ボスはまだ、あたしのことも戻したいんだ」

ウィルはなんだか楽しそうだ。

それに対し、リヨウはウィルに追いつき、刀を振るうのに精一杯の様だ。

「で、リヨウは何の能力なの？」

その瞬間、ウィルの身体は地面に張り付いた。

「重力操作？ それとも、過重力？」

少しもあわてること無く、ウィルは聞く。

リヨウは黙ってウィルに近づく。

「えー、教えてくれないの？」

ウィルはそう言つと立ち上がった。

「な、何故……」

「教えないよ」

ウィルはそう言つと、リヨウにナイフを突き刺した。

## 第十二話（後書き）

この小説の方向性を見失いつつある……。

## 第十三話（前書き）

久しぶりです m ( — ) m  
キャラがぶれてないか心配……

## 第十三話

「分かるー？ あたしが危険、だっていう理由」

ウィルはナイフを抜く。リヨウはその場に崩れた。

「ま、あんた向いてないし、良いんじゃないかな」

リヨウは顔を上げる。クロスはあ、と声を洩らす。

「目が……」

リヨウの右目が黒くなっていた。

赤い目は不老不死、実を食べた証とウィルが言っていた。

「じゃ、かえろっか？ 姫が探してるかもよ」

「クロ、ヴェガ、どこに行ってたの？」

ドアを開けた瞬間にシェーラがそう言う。

「そうや、急に出ていくからー」

リリーもシェーラの後ろで不満げだ。

「姫、ごめんね？ あたしが二人を連れてったんだー」

「ウィル……久しぶりっ」

シェーラはウィルに抱きつく、といってもウィルの方がわずかに小さいので、

ウィル抱きしめられている形だが。

「あ、そうだ。ウィルも折角来たから私が何か作ろうか？」

シェーラはぽん、と手を打つ。

そして、キッチンの方へかけていく。

はずだった。

シェーラはその場に崩れ落ちる。

「シェーラっ!？」

クロスが近寄ろうとすると、ウエガに止められる。

ウィルが何かを言っている様な気がするが聞こえない。

そして、シェーラはすぐに運ばれていく。

「あいつ、あんなに悪いのか……?」

クロスはぼつり、と呟くように尋ねる。

「ええ……」

ウエガは答える。

「あと1年、生きられればいい方だと」

「あいつは……知ってるのか?」

クロスが再び尋ねる。ウエガは無言で頷いた。

「だから、貴方に会いたい、と。それと、こうなるまでは言わないで、とも」

クロスは唇を強く噛む。

無知で、無力な自分が悔しくて。



シェーラは1週間、生死の境をさまよったが奇跡的に回復した。ウィルの看病のおかげ、ということになっている。

それから、クロスは何事もなかったようにふるまった。

シェーラがそうしていたから、だ。

彼女の望むことは全て叶えたい。

出来ることならともにいきたい。

毎日が過ぎていく。

彼女の時間が消えていく。

そう、あれからもう1年がたとうとしていた。

シェーラの16回目の誕生日が、命の終わりが迫る。

## 第十三話（後書き）

次回からいよいよ本編です（え

## 第十四話（前書き）

お久しぶりです。

なんか、今回はめちゃくちゃ分かりにくっ、的な話ですorz

## 第十四話

「だけどね」

16才の誕生日を迎えたシェーラはわずかな命の灯を守っていた。

「私、次の雪が見れないなら見てみたいものがあるんだ」  
シェーラは窓から目をそらす。

「ねえ、クロ。私と一緒に南に行こう？」  
クロスははつとする。

「まさか……『赤い実』を食べるのか？」  
あれだけウィルに止められているのに。  
食べても苦しみながら生きるだけ、と。

シェーラは首を横に振る。

「違うの、ただ私遠くに行ったことが無いから、行ってみたいな、  
って」

ほんのささやかな願いなのかもしれない。

ただ、クロスはシェーラには幸せにできるだけ長く生きてほしい。  
「ああ、分かった」

二つの願いは叶わない。

「行こう、二人で」

クロスはシェーラの手をとる。

なんて、この世界は残酷なんだろう、と思いながら。

「ふふ、外に出るなんて、いつぶりかな？」

シェーラはそう呟きながら二階の窓から外に出る。  
クロスはシェーラをしっかりと抱きしめた。

まだ、ここにいる……よな。

クロスはしっかりとシェーラの存在を確かめる。  
共に……いきたい。それさえも叶えられない。

「クロ、早くしないと誰かに見つかるよっ……」

「あ、ああ。そうだな……」

これは、決して生きるためではない。

むしろ、彼女の時間を奪う旅だ。

彼女も……それを知っている。

それでも、願いを叶えるために旅立つ。

俺は……止められなかった。

このまま長く生きるより、一瞬の時を笑っていてほしい……なんて。

俺は、人殺しだ。

「クロー？」

心配そうにシェーラが顔を覗き込む。

「何でもない。行くか」

シェーラは嬉しそうに頷く。

今、一つの道を選んだ。

もう、戻ることはないのだろう。

クロスとシェーラは屋敷を出た。

静かに白い雪が降り続き、彼らの足跡はやがて消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8891s/>

---

雪時計

2011年11月20日03時18分発行